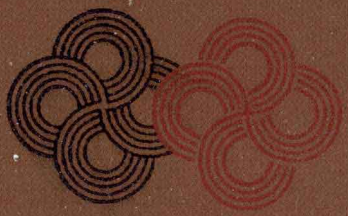

百草＝著者未詳
我宿草＝著者未詳
愚雑俎＝田宮橘庵
松亭漫筆＝中村経年
孝経楼漫筆＝山本北山

9

日本随筆大成

第三期

吉川弘文館

日本随筆大成　第三期第五巻
昭和四年十二月二十日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　桜井庄吉
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第三期〉9
昭和五十二年三月二十一日　印刷
昭和五十二年四月　五　日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京〇―二四四番
製　作　株式会社　たんちょう社

解　題

本集には、百草、我宿草、愚雑俎、松亭漫筆、孝経楼漫筆の五種を収める。

百　草　六巻

著者未詳

本書は、多く江戸初より幕末に至る間の出来事について述べたもので、六巻より成っているが、その殆んど全部が諸書よりの抄出であり、編者の興味のおもむくところも一定せず、いささか取止めのないものとなってしまっている。

その内容は、巻一は事件・異聞、巻二は堂上関係記事、巻三は巻一にほぼ同じ、巻四は年中行事関係記事、巻五は雑抄・異聞などをそれぞれ主としており、殊に巻五の末に北沢正誠の遷都説を録しているのは、甚だ唐突で其の意を得ない。また巻六は、全部が、足代弘訓の「伊勢の家苞」が録されている。「伊勢の家苞」は、足代弘訓が天保二年に江戸に遊んだ時のことを記したものであり、「日本藝林叢書」第五巻にも収録されているが、本書の巻六に収録されているものの中には、藝林叢書本に見えない条があり、藝林叢書本は抄録であったことが知られ、その点に本書の価値が認められる。

本書は、従来所収のものはなく、本大成第三期にいたり、無窮会神習文庫所蔵の写本によりはじめて収録された。神習文庫本には、「堀田文庫」の蔵書印ならびに堀田幸正の名が見られ、更に巻六に足代弘訓の「伊勢の家苞」が収録されているので、同文庫目録には、本書を、「足代弘訓著、堀田幸正」としているが、巻五末に、明治十五年八月の北沢正誠の遷都説があるので、足代弘訓の著でない

ことは明白である。或いは、堀田幸正が諸書より抄録したものであったかもしれない。

（北川）

我宿草　一巻

著者未詳

本書は、その序文に、太田道灌の「我宿は松原つゞき海近く富士の高根を軒場にぞ見る」の歌を引いている。書名はそれによっているので、また別に「文武徒然我宿草」「太田道灌自記」あるいは「太田道灌随筆」などとも呼ばれ、著者その人を太田道灌としているのであるが、道灌に仮託して何人かが拵えた随筆であろうこと、疑いを容れない。朝倉景衡編「遺老物語」巻七所収の「我宿草」抄出に附する新井白石の識語にも、次のごとくにある。

「右の墨付の本書を持しものは、浅野が家中の侍なりと申き。道灌の自記といふ事は心得られず。これは其本書を写し得たるものの、開題の所に道灌歌書などかきくわへ写し出して、其書のうれん事を謀りしなりと見へたり。本文の如き、かならず後の鎌倉の代に、かゝる事に心を用ゆるものゝ書記しおきけるものと見へたり。怪しかるべきもの也。」

その後には、大田錦城もその「梧窓漫筆」の中で、道灌の著書などと見るべからざることをいっている。

その箔が剝げてしまうと、一向に採るに足らぬものということになってしまうが、その版本には、享和三年のものと、弘化三年、嘉永三年のものとの三本があって、多少は世に行われ来ったのであった。今回の重刊にあたっては、内閣文庫蔵享和三年版に拠って新たに振仮名及び挿絵を加え、序意の末尾「発端の……」以下四行と同版の跋文を附した。なお旧本の橘潜夫の跋文は、参考した嘉永本に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

附した序であるのを、訂して序意の前に移した。潜夫の文は「壬戌の冬」に誌されており、壬戌は享和二年であるから、これはもと享和三年版の序文として誌されたのではなかっただろうかと思われる。私が閲たものは享和・嘉永の二本で、弘化三年本は未見であるが、本文の異同は別にあるまいと思う。

（小出）

愚雑俎　五巻

田宮仲宣（たみやなかのぶ）著

本書の封面には、「田宮仲宣大人徒然随筆」とあり、また、刊行書肆細野重右衛門の口上に、「凡ソ人ノ博覧ヲ助クルモノ、随筆ノ書ニシクハナシ。然ルニ儒者ノ筆記ハ儒ニ偏リ、仏者ノ談叢ハ仏ニ淫シテ、著編広カラズ。皆以テ緒余ノミ。此書ヤシカラズ。皇朝ノ正史ヲ始メトシ、儒典仏経ヲヨビ坊間ノ俗談陋語トイヘドモ、人世ニ裨益アルコトハ、アゲテ悉ク是ガ考証ヲナシ、国字ヲ以テヒトリ学問ノカタカラザルヲ示シ、画ヲマジヘテ児女子ノ翫ニ供スルモ、マタ是先生ノ微意ナリ云々」とあるのが本書の性格を尽している。

内容は、通俗的に砕いた書き方をしているが、著者は仲々気骨のあった人らしく、時俗の好尚におもねったところはなく、却って苦言を呈しているところが多く見られる。また相当に口の悪かった人でもあったらしく、荷田春満、本居宣長、松尾芭蕉などをそしり、また茶道をそしるなどしている一方、柳里恭や神沢杜口などの人柄を欽慕しているところに著者の好尚の一端を知ることが出来よう。本書を読んで、これを「愚」とみるは、観る者の愚にして、作者の愚なるに非ざることは序にいうごとくである。

本書の書名が、明の謝肇淛の随筆「五雑俎」をもじったものであることはいうまでもないが、その五巻に分ったことも、「五雑俎」の天・地・人・物・事の五部に分ったものにならったのであろう。「愚雑俎」の名は、同人の随筆「嗚呼矣草」「つべこべ草」などとともに、その命名の奇には一笑を禁じ得ない。

本書は、前集二巻・後集三巻の五巻より成り、前集は文政八年の刊行、巻頭に文政五年の村上恒夫、愛牛また亦愚居士と号する人の漢文序があり、後集は天保四年に刊行された。この中、前集二巻のみは、さきに「随筆大観」巻二に収められている。今回所収のものは、前後集とも五巻、国会図書館蔵の刊本によって再訂し、振仮名と挿絵を加えた。

著者田宮仲宣については、本大成第一期第十九巻所収の「嗚呼矣草」の解題を参照されたい。

（北川）

松亭漫筆　二巻

中村経年（なかむらつねとし）　著

為永春水の門人として知られる松亭金水こと中村経年には、嘉永二年の序のある「積翠閑話」四巻があって世に行われている。本書はその著者の第二随筆書で、翌三年の自序が附せられている。内容は極めて低級であるが、それは婦女子の読物として作られたものであるから致方がないともいえよう。しかし前著同様に、その文章の冗漫なところなどの多いのは、今少し何とかならなかったものかといいたくなる。中に「蜀山人記臆の説」の一章があるが、これは多くの人々に附会せられている話で、唐土にも類話のあることを、森銑三翁は指摘している。挿絵に无名翁画とあるのは、渓斎英泉である。

今回の重刊にあたっては、国会図書館及び内閣文庫蔵版本を参看し、新たに振仮名を加えた。

著者の中村経年については、第二期第十巻所収の「積翠閑話」の解題を参照されたい。

（小出）

孝経楼漫筆　四巻

山本北山（やまもとほくざん）　著

本書は、山本北山の手稿の散佚欠落したものを、その孫山本学半が整理して、北山の歿後凡そ四十年を経た嘉永三年に刊行されたもので、四巻より成っている。

その内容は、諸書より抄出したものが多く、各条はみな短く、備忘の為の抄録というに過ぎないが、和漢古今にわたって、文物・制度・風俗・習慣・言語・文字・詩歌・書画・典籍など極めて多方面におよんでおり、以て著者の博覧をみることが出来る。

本書は、さきに「随筆全集」巻三にも収められており、今回収録したものは、内閣文庫蔵、寛政八年の刊本によって再訂した。

著者山本北山は、名は信有、字は天禧、通称は喜六、北山はその号、また奚疑翁、孝経楼主人等の号があった。江戸の人。家は代々幕府に仕えたが、その職の卑微なるを恥じて辞したという。学ははじめ伊藤仁斎・荻生徂徠等を主として古学を修めたが、のち井上金峨に学び、折衷学に転じた。年二十二、孝経集説を著し、ひろく名を知られるにいたり、年二十八、作詩志彀・作文志彀を著し、古文辞を痛撃し、為に海内の文風が一変するに至った。その業はひろく行われ、門に入りて学ぶ者も多く、寛政異学の禁にあたっては、五鬼の一人に数えられた。その学は該博にして、上は天文より、下は医卜小説雑技に至るまで兼通せざるものはなく、また経済治民に手腕があり、秋田侯、高田侯の眷顧をうけ、輔政の功がすくなくなかったという。また、その人となりは、豪強にして慷慨の気があ

り、自ら儒中の俠と称していた。門下に、子の緑陰、また大窪詩仏、朝川善庵、蒲生君平、原念斎、大田錦城、東条琴臺などがある。文化九年五月十八日歿、年六十一、私諡して述古先生という。墓誌銘は同門の盟友亀田鵬斎が書いたが、その措辞の当不当をめぐって、北山・鵬斎の両門人の間に争論の応酬があった。

著書は、前記の外に、刊行されたものに、詩藻行潦、文藻行潦、孝経楼詩話、笑堂福聚など十三部あり、未刊のものも多く、中に日支交渉史料をあつめた「日本外志」などもある。

（北川）

目次

百草……一
我宿草……一三五
愚雑俎……二〇一
松亭漫筆……二九一
孝経楼漫筆……三六三

（解題　北川博邦　小出昌洋）

百草

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

目次

巻之一

文政五年江戸日本橋掛直し渡り初人名　七
上州新田祖廟の松樹、安永の比烈風の節風折せしに、其折口自然葵の形ある事　七
松浦家にて椎木を正月門に立る事　八
寛政の比より文政の初迄、御勘定勤めたりし岡本忠次郎正成の事　九
天保二年五月御勘定奉行内藤隼人正家来横山平馬妻和歌の徳により宣旨を賜ふ事　一〇
小石川伝通院山内大暢寮所化岱雄之事　一三
浅草竜宝寺前庄兵衛大鯉を得る事　一五
上杉輝虎公辞世之句　一八
加州石川郡銭屋五兵衛之事　一八
佐久間象山詩　二一
広沢之碑銘　二二
田畠西行庵　二二
三河国小泉村百姓万平の事　二三
天保十五年永代橋掛ヶ替渡り初人名　二三
七福神順路　二三
熊送リ実報　二四
毒アル草木　二五
水戸殿御庭名所　二七
大仏殿建立ニ付御勘定奉行より之被二仰渡一　二八
文化八年一橋一位殿准大臣宣下先例　二八

巻之二

御即位御道具　三〇
嘉永改元之事　三三
准三后宣下一会　附本宮次第　三四
門号　宣下之次第　四三
御元服御調度　四四
御講書次第　四七
悠紀主基御宮殿　文政度　四九
越階　宣下　五二
大納言様御兼任之節、高倉家内問合答書　五三

巻之三

定家卿真筆冷泉家え被下候事　享保十二年　六〇
柳屋理一郎隅田川盃流しの事　文政二年　六一
能役者喜多七太夫家の事　六三
小笠原嶋の事　享保年間　六三
細川越中守より松平越後守えの書翰　六六
竜の宮夢物語　文政十二年　六七
桂昌院夫人所蔵小野小町色紙の事　七一
御宮御霊屋町人献銀名前　七一
下曽根金三郎献言　天保九年　七三
奥州安達原黒塚略記　七六

巻之四

正月門松　七七
宝　船　七八
年の初万歳の事　八〇
土御門家より万歳に給ふ職札　八一
駿河舞　八一
ひいなあそびのゆらい　八六
箏の事　八七
筑紫琴の事　八八
須磨琴の記　八九
上野犬桜　八九

八朔　附武家の式　九一

巻之五

大日本城地　九九
銅板考　一〇二
大日本史領状写　一〇三
浅草馬道え人の降りし事　一〇五

巻之六

伊勢の家苞　二七
観二木母寺縁起一　一〇六
寒風嶺震動　一一一
遷都説　一一三

百　草　巻之一

著者不詳

○文政五年江戸日本橋掛直し渡り初人名

文政五年午六月五日、江戸日本橋掛直し普請成就之節渡り初之者、

生国奥州盛岡領一戸村高三千石百姓

百四十二才　清左衛門
百三十九才　同妻　さわ
百十二才　忰　清蔵
百九才　妻　さき
九十五才　孫　清之丞
八十九才　妻　ふち
七十三才　彦　清之助
六十八才　妻　はな
四十一才　彦子　清右衛門
三十九才　妻　さえ

○上州新田祖廟の松樹、安永の比烈風の節風折せしに、其折口自然葵の形ある事

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo